

平成22年度 学校関係者評価表(結果)

学校番号	学校法人静岡理工科大学 静岡北高等学校	記者	森竹健治
------	---------------------	----	------

学校教育目標	1. 常に誠実で、清らかな心をもって物事に真剣に取り組むことができる人材を育成する。2. 現状に甘んじることなく、日々新しいものを創り出そうとする気持ちを持ち、何事にも積極的に挑戦していく人材を育成する。3. 技術の進歩が著しい今日、大学院・大学・専門学校という高等教育機関の場において、高度な科学技術を習得できるように、基本的な学習を身に付ける。	【総合評価】 学校目標の3点を常に念頭に置き、校長の強いリーダーシップの下、教頭・3部長・事務長の連携がよく取れていた。さらに学年主任を中心とした学年部の運営が意識して行われていた。 指定4年目となったSSHの事業内容においても、「現段階では、当初の計画通り研究開発のねらいを十分達成している」として、平成19年度指定7校中でA評価を得るなど外部公的機関から高い評価を得ている。 学校教育目標と教育方針を着々と具現化しつつある。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望を持ち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる。			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 進学校としての信頼度を高める		4	評価点は昨年度と同点であるが、ポイント(四捨五入前)では0.2ポイント上昇している。これは、国公立大学現役合格数が3年連続50人を超えたところがあり、ポイント増は教員の指導力向上を意味している。	数字だけにとらわれることなく、入学した生徒を育てることにより、保護者・中学教員・地域の信頼を得ることに繋げ、進学校としての実績を確立させる。
2 法人内各校への進学者を増やす		4	高・大一貫コース、高専一貫コースの指導体制が確立し、理数科、普通科進学コースからも理工科大学への受験者、進学者を増やそうと努力した。	法人内・法人間専門学校と大学の連携を高め、高校側からも各校の魅力あるプログラムを提案し、その魅力を在校生や中学生とその保護者に広報していく。
3 中学校教育プログラムの充実		4	中高一貫を見据え、公立中学校を上回る授業時間数と他校には類のないプログラム(言語技術教育、CASE)に取り組みなどの利点が構築された。	中学校の教員と高校の教員が一貫教育について話し合機会を設け、よりよいもの築き上げていくと同時に、内進生(本校進学生)を受け入れる高校側の準備をする。
4 キャリア教育の充実		4	キャリアパートナーシップはうまくいっている。学年部の連携が重要で細部まで連絡系統が機能し、生徒が社会に目を向けるきっかけとなった。	キャリアパートナーシップについては引き続き、参加者とその受け入れ先を増やしていく。教科と連携したキャリア教育を構築する。
5 新学習指導要領導入のための準備		4	教務部長、教科主任が主体となってカリキュラムを検討し、各教科部会で研究するなど早めの準備がされている。教科の代表が各科の教育課程説明会に参加し、教科内での情報の共有化が行われた。	新学習指導要領とそれに基づく教育課程の編成は、学校改革とも捉えている学校もある。本校においても進取の構えで教育課程編成に臨む。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	昨年度大きな成果を上げたSSH活動において、本年度は国際的な活動を行うことにより、教職員・生徒のさらなる飛躍の場を開拓し、外部からより一層高い評価を得る。	校長の方針に基づき、各分掌・学年がそれぞれの活動計画を推進・実行し、社会から評価される教育成果を上げた。また新たな学校経営として、平成22年4月に静岡北中学校が開校した。	4	達成目標であるSSHの国際的活動として、「台湾・日本科学教育交流シンポジウム(SEES2010)」を本校主催で開催することができた。	SSHに係わる生徒と教員だけでなく、その教育成果を校内と地域に広めていく。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画、指導、課題実施、学習状況把握	今回のSSHの再申請を視野に入れながら、理数科における教育課程の大幅な変更を検討しておくことが必要となる。加えて、今後の社会的ニーズや本校のあるべき姿をイメージしながら、学科・コースの精査・再編なども考えた教育課程の検討に着手することが求められる。また授業展開に関しては、すべての教員の授業において、それぞれの学科・コースの場において、わかりやすく教育成果が上がったといえる授業展開がなされるよう研鑽に努めることが課題となる。	理数科における教育課程の変更を検討した。当初は、将来のあるべき姿を想定した大幅な教育課程の変更を検討したものの、文部科学省とのやり取りのなかで、指定期間中は極端な教育課程の変更は認められないといった判断が下り、最小限の変更にとどまった。個々の教員のスキルアップに関しては、予備校の研修などは活用したものを実施し、授業展開にいかした。また指導教員制と科目ごとのグループ化によるシラバスの作成を通じ、教育内容の教員間の差が無くなり教育の質をあげることができた。	4	理数科、国際C科のさらなる発展と、普通科の再構築を視野に入れた教育課程の編成が着手された。普通科においては、類型(コース制)の再構築を行い、進学校として定着する本校にとってふさわしいものとした。	10年に一度の改定である学習指導要領と、それに基づく教育課程の編成作業をもって、教員のスキルアップを図る
生徒指導	健全な高校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	さらに一歩個々の生徒の心に見込んだ生徒指導が展開されることが必要。価値観が多様化する社会の中で、様々な環境で育ってきた生徒たちに対し、社会で共通の規範は理解させなければならない。心の病で苦しむ生徒に対しては、継続して家庭・スクールカウンセラーとの連携をとりつつ、個々の生徒に合った対応を取ることが必要。	問題行動の発生件数は減少しており、指導成果は上がっていると思われる。これは、教員の早め々の声掛けと、事が起きた時の迅速な全校集会の開催などにより、生徒の気持ちを定期的に引き締めたことが問題発生の抑制につながった。また、社会的な問題でもある心の病で苦しむ生徒に対する対応も、一律対応でなく、個々の生徒の状況に応じた柔軟な対応を取られており、生徒の将来の芽を摘むことのない指導体制ができています。	4	始業式・終業式を通じて式典に臨む姿勢づくりを指導した。十分に効果があつたとは思われないが、卒業式で卒業生・在校生共々、厳粛な姿勢で臨めた。生徒相談室の模様替えや関連図書を整備を行い、精神的な安定をはかる環境整備につとめた。	『心を育む』を目標に式典に臨む姿勢づくりや、清掃活動の徹底、自己を見詰め直す読書の症例などに取り組みたい。
進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキュリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、就職指導、進学指導、キャリアパートナーシップ事業	就職については、今だ高校生の就職状況が好転するとは予想がたいので、高いハードルを越えるための基礎学力やしっかりとした社会認識をもたせる指導をすることが必要。進学に関しては、さらなる実績の向上を目指していく指導をしていくことが求められる。加えて、この実績を広く社会に認知してもらう広報活動をしていくことが必要。	就職者に関しては、予想通り厳しい社会環境の中でかなりハードルの高い状況がみられ、就職規模者に対し個々の希望する職種に決定させられなかったことについては、反省が求められる。一方、進学に関しては、母集団が例年より極端に少ない学年でありながら、国公立59名の合格で、昨年以上の成果を上げることができた。加えて、キャリアパートナーシップの実施において、新たに清水中央ロータリークラブの協力を得られたこと。また進路講演講座を行ってくれた事業所も同プログラムの受け入事業所として加わってもらうことができた。	4	進路を決めることに関して意識の高い生徒は、自ら積極的にオープンキャンパスや体験授業等に参加し、情報収集に努めていた。そのような生徒に対しては、願書の書き方の指導と確認、志望理由書・自己PRの作成、小論文指導と面接練習をしっかりと行った。その一方で、進路意識の低い生徒に対しては保護者と連絡を取りながら、生徒に声かけをきた。オープンキャンパス等の日程を調べて参加させること・出願期間の確認をさせることから始まり、出願書類の作成・面接練習まで逐一生徒を動かしてきた。家庭学習期間中も進路未決定者の指導にあたり、進路決定率100%を決めた。	生徒個々の希望する進路(進学・就職)決定のための情報収集を行い、決定のための方策を講ずる。

<p>安全管理</p>	<p>日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校として校内の危険箇所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる必要がある。</p>	<p>防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行</p>	<p>防災や危機管理について、毎年のルーティンの中で意識付けをするといったことだけでなく、変化をつけながら、様々な角度から真に教職員・生徒が危機意識を高めていくような体制を学校として見直しをしていくことが必要。</p>	<p>防災意識に関する啓発活動は予定通り実施できた。ただし、安否確認システムが有効に活用されているかについては、今一度検証が必要となる。教員の危機管理に関する意識は、相対的には高いものがある。</p>	<p>3</p> <p>防災訓練は避難経路の確認にとどまった。施設の危険箇所確認は定期的に行われ、新たな発見もあった。スクールバスは、一方的な被害を受ける物損事故はあったが、ケガ人を出すことなく、運行できた。生徒の怪我に通じる事故はなかった。</p>	<p>地震だけでなく、他の災害に対応できる安全管理と、臨機応変に対応できる応用能力を身につけさせる。</p>
<p>健康管理</p>	<p>生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療報告を確実に行う。また部活動の活性化を図り、ボランティア活動に積極的に取り組む。</p>	<p>検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化、ボランティア活動への参加</p>	<p>学校の活性化においては、やはり文武両道の活躍をすることが求められ、次年度はこの点を強く意識した活動を展開したい。そのためには、教員が部活指導に時間を取れる体制づくりも必要となる。さらにSSH活動と連動した科学部においては、昨年度以上の実績を上げ、再申請に向けた布石を作りたい。</p>	<p>治療報告者に対する指導は徹底できなかった。運動部においては、昨年度以上の活動ができた部もあれば、できなかった部もあった。文化部に関しては、とりわけSSH活動と連動した科学部における受賞歴に目を見張るものがあった。</p>	<p>4</p> <p>生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行はできた。特に実施にあたっての新たな方法がとられるなど、リニューアルした部分が多い。</p>	<p>学校全体のグランドデザインとして運動部の活動を再構築する。</p>
<p>特別支援教育</p>	<p>法人のスケールメリットをいかし、本校独自の高・大、高・専一貫教育を推進し学園全体の活性化を図る。また、課題研究を推進し他校との差別化を図りつつ、進路実績につなげる。</p>	<p>高・大一貫教育、高・専一貫教育、外部機関との連携教育、SSH事業への取り組み、課題研究</p>	<p>高・大一貫教育に関しては、ワーキンググループからの提案を実行し、その都度検証することが必要。高・専一貫教育については、個別の専門学校との対応ではなく、専門学校部門と高等学校部門との間で高・専一貫教育に対するあり方を検討することが求められる。さらに課題研究に関しては、対象となる生徒のコースを広げることも必要だが、同時にそれを指導する教員組織の体制作りをすることも必須の課題となる。SSH活動に関しては、9月のストックホルムの世界大会で世界の頂点に立つことを目指すと共に、コアSSHで採択された台湾の高齢計画招聘のホスト校として、計画の実施を確実にを行うことが求められる。</p>	<p>高・大一貫教育のワーキンググループによる検討がなされ、法人・大学・高等学校に対する提案が示された。また、高・専一貫教育に関しては、提携する各校との間で、個別に一貫教育を充実させるための施策を検討し改善を図った。さらに、課題環境に関しては、今年度は静岡理工科大学で本発表を実施することができ、理数科・国際コミュニケーション科・普通科高・大一貫コースにおける課題研究の成果を一同に検証する機会を得ることができた。そして、SSHの全国発表会では科学技術振興機構理事長賞を受賞し、3月には日本ストックホルム青少年水大賞において大賞を受賞し、日本代表として世界大会に出場することとなった。</p>	<p>4</p> <p>高・大一貫教育、高・専一貫教育における双方の教員の意識は以前よりそろってきた。スケールメリットを生かしたコース編成やプログラム、SSH・コアSSH活動内容が、受検生に受け入れられ、入学希望者が増加に繋がった。</p>	<p>目標達成のために以下を継続していく。高・大一貫教育に関しては、ワーキンググループからの提案を実行し、その都度検証することが必要。高・専一貫教育については、個別の専門学校部門と高等学校部門との間で高・専一貫教育に対するあり方を検討することが求められる。さらに課題研究に関しては、対象となる生徒のコースを広げることも必要だが、同時にそれを指導する教員組織の体制作りをすることも必須の課題となる。</p>
<p>組織運営</p>	<p>組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が勤務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から考え、日々の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。</p>	<p>効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用</p>	<p>年度に応じた経営目標に沿った組織編成が必要であるので、一概に組織のスリム化が正しい方向性とは言えないが、ネットワークの軽い組織形態を将来に向けて検討することが必要。経理業務に関しては、引き続き学校の中長期計画に基づき、将来をみすえた予算編成を行っていくことが求められる。加えて、情報管理については、より一層強い規範意識をもつことが必要。</p>	<p>組織の観点に関しては、スリム化することができなかった。とはいえ、円滑な運営がなされなかったということはない。情報の共有化の点については、必ずしも報告・連絡・相談がすべての点について、上位に行われていたかについては課題が残った。経理業務については、中長期計画の見直しに伴った予算編成計画を編成することができた。情報の管理意識に関しては、個人にコンピュータが貸与される体制が整った面もあるが、一方でペーパーの管理等に関して若干の甘さを残した。</p>	<p>3</p> <p>校長の強いリーダーシップの下、教頭・3部長・事務長の連携がよく取れていた。さらに学年主任を中心とした学年部の運営が意識して行われていた。ただし、姉妹校との教員交流(人事異動)はあるが、こうした環境の中で私学独自としてのリーダーシップを持った教員の育成が課題である。学校教育目標と教育方針を着々と具現化しつつある。</p>	<p>効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用について再構築する。</p>

研修	<p>学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。</p>	<p>計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施</p>	<p>教職員の資質向上に関する研修は継続して実施していくことが必要となるが、その研修を実施することで組織として何を变えるかといった目的意識をしっかりと持って教員研修を展開することが必要。さらに研修報告会を実施すると共に、フィードバック研修もを行い、スキルの維持を確認することも必要。</p>	<p>中学で導入される言語技術教育の研修等に代表されるように、時代をとらえた研修を実施できた。また、教員の授業力向上のためのスキルアップ研修も例年通り実施した。ただし、報告会についての実施は徹底できなかった。</p>	<p>4</p> <p>職員の意識向上及び授業力向上に繋がる研修ができた。特に新任教員においては、個別に対応を行った。職員会議、教科部会の実施等、フィードバック研修を行った。</p>	<p>学校の教育内容と教職員の資質向上のために、計画的な研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく。</p>
保護者、地域との連携	<p>学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる発展を目指す。</p>	<p>保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼</p>	<p>静岡北中学校の開校に伴い、保護者の会・同窓会・教育振興会の位置づけが変化するものの、円滑な活動が展開されるように規約改正を行っていく必要がある。またSSH事業、キャリアパートナーシップ事業をより充実したものにしていくためにも、ホームページを一段高い広報媒体として位置付け、学校の活動をリアルタイムに社会にPRし、本校の教育活動を理解してもらうことが求められる。</p>	<p>保護者の会との定例会は、ルーチンとしての会議でなく、学校と保護者の情報交換・意見交換の場として十分機能した。キャリアパートナーシップについては、事業所の拡大ははかれたが、その一方で辞退する企業も出てきた。SSH事業に関しては、地域貢献は十分にできており、静岡市の理数教育の検討会議においても、その取り組みが話題として取り上げられた。ホームページの広告媒体としての機能はやや停滞した。</p>	<p>4</p> <p>保護者の会との連携は十分できていた。中学校参画に対する規約改正も行われた。</p>	<p>保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼ができるよう、より強化を進めていく。</p>
施設設備	<p>施設設備の美化と定期的な点検を確実にし、安全管理に努め、生徒たちにしっかりと学習環境を整備する。</p>	<p>効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用</p>	<p>学内の美化に関して、さらに一段高い意識での生徒の活動が求められる。図書館の活用については、進路研究のための基本図書の充実に加え、生徒の感性を育てるための基本図書の整備も必要である。将来的な生徒数を見越した、教育施設の整備計画を検討することが求められる。</p>	<p>環境美化に関しては、徐々に個々の生徒の意識に浸透してきていると思われる。図書館の活動に関しても、受験や日常の教育活動等様々な場面で積極的に活用されていた。</p>	<p>4</p> <p>図書館の基本図書については、進路研究・課題研究に関する書籍の充実も図りながら、7割は文学系統の生徒の感性や心を育てる書籍の充実をおこなった。</p>	<p>現在ある施設・設備の中で、生徒の十分な活動できるように、経費面も考慮しながら再構築していく。</p>
総合評価					4.0	